



Book Review

評者:真島久美子 愛仁会看護助産専門学校

強みと弱みからみた

在宅看護過程 + 総合的機能関連図

編集:河野あゆみ/編集協力:草場鉄周/本体:3800円+税

発行:医学書院/TEL:03-3817-5657



在宅看護ならではの学びの指針に

在宅看護論は、平成21(2009)年のカリキュラム改正(第4次改正)時に統合分野として位置づけられ、地域で生活しながら療養する人々とその家族を理解し、在宅での看護実践の基礎を学ぶことが求められてきた。また、終末期看護も含め、在宅での基礎的な看護技術を身につけ、多職種連携における看護の役割を理解することも必要とされている。さらに、少子・超高齢社会による2025年問題に対して、高齢者の尊厳の保持と自立支援の目的のもと、可能な限り住み慣れた地域で人生の最期まで自分らしい暮らしを続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制(地域包括ケアシステム)が推進されている。

本書は、このような時代の看護を支える看護師養成のための在宅看護過程の参考書である。

在宅看護論実習では訪問看護ステーションの看護師に同行し、在宅における看護実践を見て学ぶことが多い。本校では、在宅における対象理解も、病院実習と同じ枠組みで情報を得て、看護過程を展開していた。しかし、看護の初学者は、まず、対象となる疾患を中心とした看護ケアの学習を行うため、療養者を取り巻く家族関係を含めた在宅での看護実践をイメージすることが困難である。また、急性期病院での実習を想定した対象理解や看護過程は、基本的に問題解決型思考であり、在宅療養者への

看護実践に用いることで無理が生じることも否めない。筆者は、在宅看護ならではの学習についての指針を求めているところ、本書に出会った。

著者の河野先生は本書のなかで、在宅での生活に影響する対象者の機能全体を総合的機能とよび、①疾患・医療ケア、②活動、③環境、④理解・意向の4領域に区分してとらえると述べている。さらに、在宅看護過程では、エンパワメントに着目することが基本であるとし、疾患の治療に伴う看護では弱みを解決する視点、生活に寄り添う看護では強みを活かす視点が重視されやすいが、本書ではあえて両方の視点が必要という立場で記載されている。

また、本書には、健康障害別や心理・社会的課題別の看護過程の事例が多く掲載されている。在宅療養者本人とその家族のおかれた状況を、在宅での生活に影響する視点でアセスメントし、対象のもつ強みと弱みを判断したうえで生活を整える看護実践の思考を養うことができると感じ、本校の副読本に採用することとした。

自らの生活経験も乏しいといわれる昨今の学生にとって、生活の基盤である在宅での生活をイメージすることはとても大切である。本書を用いることで、対象理解の視点と対象の状況に応じた看護を学内で学ぶとともに、実習でさらに在宅看護ならではの学びを深めることができると期待している。